talk! talk! talk! 女優・エッセイスト・黒田福美さん

女優・エッセイスト
黒田福美さん
今年6月に行われた日韓共催のワールドカップを通じ、以前にも増して身近な存在になった韓国。しかし、韓国が多くのメディアで取り上げられるようになったのはごく最近の事だ。84年当時、日本から遠い国であった韓国をいち早く紹介しようと活動を始めたのが芸能界きっての韓国通としても知られる、女優・黒田福美さんだ。
そんな黒田さんが、韓国を紹介するための手段として選んだのが写真。「韓国との関係を抜きにしては語れない」という写真への思いなど様々なエピソードを交えながらたっぷりと語っていただいた。

プロフィール
くろだ・ふくみ。1956年　東京生まれ。桐朋学園大学、演劇科卒業。TBSドラマ「夫婦ようそろ」でデビュー。
**　その後、映画、テレビドラマなどで中堅俳優として活躍する一方、芸能界きっての韓国通として知られるようになる。95年には、訪韓のつどに撮りためていた韓国の写真を「韓国　ソウル　私の10年物語」と題した写真展として発表。東京、大阪をはじめとする各主要都市にて開催。また、阪神・淡路大震災の後、神戸市長田区で写真展を開催した時には、被災地の方々に「わが町」の姿をレンズ付きフィルムで撮影してもらうというイベントを企画。それらの写真は東京で「さっき見てきた神戸展」として発表し、さらに『アプローチ』（三五館）という写真集にまとめられた。**
**　99年9月には、金大中大統領自身が自らCM出演し、世界に向けて観光国としての韓国をアピールした。「Welcome to Korea市民協議会」の日本側の公報委員に正式に任命され、文化観光部　朴智元長官より委嘱状を受ける。99年11月、「2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会（JAWOC）」の理事に就任。**
**　著書には『ソウルマイハート』（草風館）、『ソウルマイハート2』（草風館）、『ソウルの達人』（こーりん社）、『ソウルの達人　完全版』（三五館）がある。2002年3月には『ソウルの達人』の集大成として、『ソウルの達人　最新版』（アミューズブックス）を刊行。また、10月15日には講談社より『ソウル　マイデイズ』が発売される。**

初めての訪韓がカメラを持つきっかけに。「韓国を記録するためのメモがわりでした」

黒田さんが写真を始められたきっかけから教えていただけますか？

ちゃんとカメラを手にしたのは、84年に初めて韓国へ行った時です。韓国をもっと知りたい、そして伝えたいという意図で行きましたから、ありとあらゆるものを記録するための道具としてカメラが必要になったのです。その時からすでに、私は韓国を取材しに行くんだという心持ちだったんですよ。誰に頼まれたわけでもないんですけどね（笑）。

最初の訪韓から、韓国に対して強い思い入れがあったんですね。

もともとは、韓国のバレーボール選手のファンになったことがきっかけで韓国に興味を持ったのですが、いざ韓国のことを調べようと思っても、周りにほとんど情報がなかったんです。今でこそ、本屋さんに行けばたくさんのガイドブックが並んでいますけどね。その当時の日本は、まだまだ韓国のことを報道しにくい状況にありました。ですから、これは直接行って見てみるしかない！　と。

その訪韓をきっかけに、日本と韓国の掛け橋になられる活動を始められたのですね。

はい。韓国が日本のマスコミで扱われにくかったということが、日本人に偏見を与え、韓国を遠い存在にしてしまっているんだということを強く感じたんです。だったら自分が韓国を紹介することで理解の一助になれないだろうかと考えたんです。よく知らない国に対し偏見だけを持ってしまうという風潮を壊したかったんです。それから、日本と韓国を行ったり来たりして、様々な形で韓国を紹介するということをしてきたわけです。

写真への興味も、その時からずっと続いていらしゃるんですね。

そうなんです。写真は面白いもの、気に止まったものを記録するための私のメモがわりになりました。だから韓国へ行く時にカメラを持っていないことはまずありませんでしたね。私と写真との関わりというのは、私と韓国の関わりを抜きにしては語れないのではないかと思います。

「初めてだからこそ、撮りたいと思った瞬間に素直な気持ちでレンズを向けることができたんです」

韓国での初めての撮影はどうでしたか？

フィルムを出し入れするのも恐いぐらいだったことを今でも鮮明に覚えています（笑）。あとは、ひたすらにシャッターを押していました。その後、何度も韓国を訪れて撮影をしてきましたが、今になって改めて自分の写真を見てみると、初めて行った時に撮影したものの中に、良いと思える写真がたくさんあるんです。95年の写真展で大きく引き伸ばすために選んだ写真も、やはり最初に訪韓した際に撮った写真が多かったのです。

では、比較的すんなりとカメラになじむことができたのですね。

何もかもが初めてだから、なんだろう？　素敵！　面白い！　と感じることが多くて、それだけ写真を撮りたいという思いも強かったんです。ですから撮りたいと思った瞬間に、素直な気持ちでレンズを向けることができましたし、それが写真にも大きく影響しているんだと思います。

ソウルにて撮影。「人と人が触れ合う瞬間の暖かみを感じる」という一枚。
ガヤガヤとした市場の音まで聞こえてきそうだ。

初めてだからこそ、感じたままの好奇心を表現できたんでしょうか？

そうですね。その時は、わぁって感動した瞬間の目線やその時の心の動きをそのままに撮影していたので、今見ても新鮮な感じがするのだと思います。今では自分の中で当たり前の風景になってしまって、見えなくなってしまっているものもあるかもしれませんね。

初めての地で、知らない人にカメラを向けることで緊張したりしませんでしたか？

「電車で向かいに座っていた女の子が、私の持っていたカメラを不思議そうに見ているところを撮りました。何度も見るうちに、この表情の不思議な魅力に気づいて。見れば見るほど吸い込まれそうになるんです」

ほとんどありませんでしたよ。私はたいてい「わー面白い！」って言いながら撮影をしていたんです。そう言ってレンズを向けると、まず私が観光客だということが相手にわかる。そして、撮ろうとしている被写体に純粋に興味を惹かれていて、なにより、私には敵意がない、他愛のない行動だということが伝わるんですね。だから相手の方も構えることなく撮影させてくださるし、気を許したときにふっと見せた素敵な笑顔が写りこんだりもしているんです。

　今でも、撮影のコツを聞かれることがあるんですが、「写真を撮らせてください」という現地語を覚えるより、「わー面白い！」という言葉を覚えておくといいですよって答えるんですよ。

なるほど。それでは、フレーミングなどの技術的な面での苦労はありませんでしたか？

私が初めて人に写真を見せた時に「もう画角（※注１）がきまっているね」って言われたんです。その時はなんの意味だかわからなかったんですけれど（笑）。

　結局、私は女優としてブラウン管に映る仕事をしていますから、本能的に、自分にとって重要なものは何か、フレームの中に何を

入れるべきかということを初めからある程度理解できていたのだと思います。今でもフレーミングを考えて撮影することはないですね。ハッと思った瞬間にシャッターを押している、そんな感じです。

※　注１　画角＝フィルムに写る撮影範囲を角度であらわしたもの。広角レンズを付けると画角（写る範囲）が広くなり、望遠レンズを付けると画角が狭くなる。

知的好奇心が満たされるようなガイドブックを……　2年もの時間と労力をかけてつくられた『ソウルの達人　最新版』

『ソウルの達人　最新版』（アミューズブックス／本体1,905円＋税）
これまでの集大成として制作された「ソウルの達人」第3弾。
これまでの「ソウルの達人」同様に、黒田さんならではの視点でセレクトされたディープなスポットが盛りだくさん。
加えて、有名な観光地もしっかりとチェックできる。
黒田さん自身が全ての取材をこなし、実際の体験に基づいて執筆も手がけている。
知的好奇心を満たす、情報満載のガイドブックだ。

2002年3月に発刊された「ソウルの達人　最新版」では、取材、執筆、そして写真もご自身で撮影されているんですよね。これまで数多く写真を撮影されているとはいえ、戸惑われた点などあったのではないですか？

たとえば料理の写真などはいままでたくさん撮りましたけど、あくまでこういうものを食べたという「記録」であって、人にこういう料理だと「わかってもらうための写真」を撮るのは初めての経験でした。

　でも、戸惑いながらでも、数多く撮影していると、自分が気持ちのいい構図というのがわかるようになってくるものなんです。料理の場合、メインのお皿はフレームと平行になるように写すのが私は好きですね。

撮影後の編集作業はかなり大変だったのではありませんか？

ええ、そうなんですよ。とにかくもう大変でした。

　毎日の取材で、多い時は200カットぐらいの撮影をしました。ということは毎日毎日200枚ずつ手もとに写真が増えていくんです（笑）。撮影はいいんですが、今度はそれをすべてチェックして、セレクトしないといけない。これは本当に大変でした。撮影した枚数は全部で2万カット。あまりにも膨大でしたから、まず、〝第一次予選〟というグループを作って（笑）。さらにそこからだんだんと枚数を減らして、〝決勝〟まで。そうして最終的にこの本のために820カットぐらいの写真をセレクトしたんです。

　写真だけでなく、構成、執筆も私がやりましたから、結局まわりからの制限は何一つない自由な状態で編集をすることができたんです。結局それが逆に大変になってしまったんです。膨大な情報を全て自分の手で決めてゆくのは本当に果てしなく、根気の要る作業でした。

「ソウルの達人　最新版」を拝見させていただきましたが、確かに、そこに費やされたパワーをヒシヒシと感じました。単なる観光地紹介ではなく、韓国の風土や文化を含めて紹介しているあたりには、黒田さんの深い思い入れも感じました。

現在ではたくさんの方が韓国を訪れるようになって、巷には韓国のガイドブックが溢れていますよね。じゃあ私があえてガイドブックを作ることの意味ってなんだろうって考えたんです。

　旅行って、何処に行って何がおいしくて安くてというだけではないと思うんです。旅先の文化を知ることでその本当の面白さや楽しさが理解できることもあります。知的好奇心が満たされるということも旅の大事な要素なのではないか、そう思ったんです。韓国に住まいを構えて、2年もかけて作った本ですから、そういったことも余すことなくカバーできる本にしたかったんです。ですからそれだけの時間と労力を注ぎ込むことができたんだろうと思います。実際、もうこれ以上はできないし、やりたくないですねぇ（笑）。

（笑）ご自身でも、大満足の本ができたという感じですね。

ええ、満足しています。この本に勝てるガイドブックがあるなら出てきてみなさいって言えるぐらいに（笑）。

『自分が良いと思う写真』とは何か？　その答えを気づかせてくれた写真展

黒田さんが初めに写真を撮り始めた頃は、自分が見たものを記録するための〝メモがわり〟だったそうですが、95年には写真展を開催されています。これは、写真に対する意識が〝メモがわり〟から徐々に変わっていったということでしょうか？

いいえ、それまで私はあくまでメモがわりとして写真を撮り続けていました。そもそも、写真展を開催するということは本当に意外な展開だったんです。「ソウルの達人」（94年）という本を作っている時に同行していたカメラマンが、「福美さんの写真はおもしろいから写真展をやったら？」って言うんです。もうびっくりしました。作品を撮っているという意識はないですから、写真展なんて思いつきもしませんでした。

　ただ、それまでもテレビや活字を通して韓国を伝えることをやってきていましたから、そういった角度から見ると、写真展も韓国を伝える一つの手段として有効なんじゃないかと思い、写真展をやろうと決めたんです。

韓国を伝えたいという思いが写真展の開催に踏み切らせたんですね。

そうですね。ところが、いままで写真の良し悪しなんて考えないところで写真を撮っていましたので、いざやるとなると、まずどうやって写真を選んでいいのかわからないんです。「これは福美さんの写真展なんだから、福美さんがいいと思うものを選べばいいんですよ」なんて言われて、じゃあ、これがいいんじゃないかなって選ぶんですけど、周りの人の反応がどうもよくない。逆に、手ブレをしていて、これはないなぁって思った写真を見て、「これは面白い」と言ってくださったりして……写真展を開催したことで、良い写真とはいったいなんなのか、どんどんわからなくなってしまいました。

結婚式を終え、顔を見合わせてホッとした瞬間の新郎新婦。「やれやれだねって感じかな。後ろにいるご両親は、そんな彼らの心情に少しも気づいていないんです（笑）」

市場で売られていた食用の犬。「犬食？　別にいいと思います。彼らの文化ですから。でもちょっと衝撃的な写真ですよね」

その状態から抜け出すことはできたんですか？

私の写真展が終わった後、ある方の写真展を見にいったとき、これは良い写真だなぁって初めて純粋に思った瞬間があったんです。あれ、これは自分にとっての“良い写真”という概念が生まれ始めたのだなと感じました。

その後、阪神・淡路大震災後の95年11月には、ボランティアの一環として神戸市長田区で写真展を開催していらっしゃいますよね。

ちょうど関西でも写真展を開催したいと思っていた矢先に、阪神・淡路大震災が起きたんです。神戸には在日の方も多いですし、韓国の写真を展示することで力になれればと思ったんです。

そして、被災者の方に自らの街を撮影してもらうというイベントを企画されました。同時に、黒田さんも長田区で撮影をされているんですよね。

長田区での私の活動を、あるテレビ番組が追ってくれたのですが、その番組のディレクターが私に写真を撮ってくれないかって言ったんです。これはまず、自分のテーマ探しから始めないとなぁと思いながら、何カットか撮り始めてみたのですが、どれもどこかで見たような、報道写真のようなものばかりなんです。
これでもない、あれでもないと街を歩き回っていたら、ある商店街があって、何気なく一軒の判子屋さんに入ったんです。崩壊している店先で、おじいさんが判子を彫っていました。次に酒屋さんに入ったんです。お店は完全に潰れ、プレハブになっていたんですが、そこで酒屋を営んでいました。次に理容室に行くと、とりあえず鏡だけ壁にひっかけてお客さんの髪を切っていたんです。そうやって商店を回っていくうちに、あー、コレだ！　って思ったんです。

ピンときた。

そうです。私が撮りたいのはコレだ、コレなんだって。
　撮影をしていると、商売人の活気がものすごく伝わってくるんです。そして、とても不思議なことに、こんな状況下でも、判子屋さんは判子屋さんの顔、酒屋さんは酒屋さんの顔、パン屋さんはパン屋さんだし寿司屋さんは寿司屋さんの顔をしているんです。いかに人間と職業が密接した関係にあり、人々に深く身に付いているものなのかということに気がついて、とても感動したのです。そんな思いでシャッターを切っていたら、ここにいる皆さんは商売をしてゆくことで生活を立て直し、自分の職業を通して自分自身を再生させてゆくのだという事実が、手に取るようにわかる写真が撮れてしまったのです

黒田さんの撮影された写真を含め、被災者の方が撮影された写真は「さっき見て来た神戸展」という写真展で発表されたんですよね。

ええ、そうです。
この神戸での一連の活動を通して、自分が好きな写真、自分が良いと思う写真とは何だろうって改めて考えました。もともと人間が好きだったのですが、特に、人と職業というような、人と何かが関係する時に生まれる視線、触れあい、情愛、そういったものに心惹かれるんだということにやっと気づいたんです。
この写真展もそうですが、いつもいつも何かをやり終えた後に、その方法や本質に気づくのです。普通はできることにチャレンジするものなのに、逆ですよね（笑）。「ソウルマイハート2」（99年）という本を書いた時、サブタイトルに“背伸び日記”と付けたんです。私はいつも、背伸びをしながらいろいろなことをわかっていくんです。

黒田さんの撮影された写真を含め、被災者の方が撮影された写真は「さっき見て来た神戸展」という写真展で発表されたんですよね。

ええ、そうです。
この神戸での一連の活動を通して、自分が好きな写真、自分が良いと思う写真とは何だろうって改めて考えました。もともと人間が好きだったのですが、特に、人と職業というような、人と何かが関係する時に生まれる視線、触れあい、情愛、そういったものに心惹かれるんだということにやっと気づいたんです。
この写真展もそうですが、いつもいつも何かをやり終えた後に、その方法や本質に気づくのです。普通はできることにチャレンジするものなのに、逆ですよね（笑）。「ソウルマイハート2」（99年）という本を書いた時、サブタイトルに“背伸び日記”と付けたんです。私はいつも、背伸びをしながらいろいろなことをわかっていくんです。

写真が写し出すひとつの真実から様々な感情が生まれる。「それが写真の最大の魅力だと思います」

黒田さんは写真を撮影して楽しむ、ということだけではなく、様々な角度から写真に関わっていらっしゃるように感じました。

そうですね。最初の写真展は取材メモのようなところから始まっていましたし、長田区ではまた別の関わり方をしていましたしね。「ソウルの達人　最新版」の写真は、必要に迫られて撮っていましたし（笑）。

そんな黒田さんから見て、写真の面白さとは何だと思われますか？

唐辛子と、それをさわる商人の手。
なにげなく撮影されたという一枚だ。
韓国を感じさせる彩りがとても美しい写真だ。

そうですね……特に、長田区で写真を撮った時に感じたことなんですけれども……写真というのは事実をそのまま写し出しているだけに、凄さがあると思うんです。たとえば文章は、どんなに忠実に伝えようとしても、人の主観というひとつのフィルターを通さざるを得ませんよね。でも写真はそのものずばりですから、その訴えかける強さといったらないですよね。また、人はその一枚の写真からもの凄くいろんなことを感じとるんです。それも不思議なことに、勇気とか、愛情とか、とても抽象的なものを。
これはソウルで撮影したんですが、私の大好きな写真なんです。ここに写っているのは唐辛子と手ですが、ただの手じゃなくて、自分の商品を慈しみながら触る商人の手なんです。私にとっては、愛情だったり、生活をしてゆくたくましさだったり、そういったものを感じる写真なんです。こんなふうに、具体的なものを見ながら、人は抽象的なものを感じとってしまう。それが写真の最大の魅力であり、面白さなのではないかと思います。

では、写真を撮ることが女優という職業に影響を与えているということはありますか？

ないですよ（笑）。そう言ってしまうと身も蓋もないですけど。写真を撮り続けることで感性が磨かれて女優としての幅が出るとか、そんな直接的なことは私の場合ないですね。もし何か影響があるとすれば、私を見ている側にあるのかもしれません。

見ている側、すなわち視聴者ということですか？

ええ。今、黒田福美という人間は世の中にさらされている状況にあると思うんです。テレビに出ていれば女優業だけでなく、トーク番組に出たり、こうしたインタビューも受けたりします。世の中に自分の実体をさらけ出しているわけですよね。

視聴者は、たとえばロミオとジュリエットを見ていても、それを演じている人が誰で、どんな人柄で、どういう考えを持った人なのか百も承知なんですよ。ロミオを見ているのではなく、誰々が演じているロミオというふうに見ていることになるんです。その人が何ものなのかという部分を抜きにしては語れなくなっている。それが今の俳優のあり方なのではないかなと思いますね。ですから視聴者が、私の演じる役と実在の黒田福美とを結びつけた時に、写真を撮っているということが、その人の意識の中で、何かにはなっているんだろうなという気はします。

女優という職業は、見ている側のイメージに左右される部分が大きいんですね。

そうですね。見る側が持つ情報によって、全然意味がわからなかったり、良く見えたり悪く見えたりするわけですから。
だからこそ、私は女優という職業はカメラの前で演技をしている時だけが自分を表現する場だとは思っていないんです。物を書くことも、韓国を紹介していくことも、写真を撮っていくことも、全てが自分の表現の場だと思っています。

では最後に、今後撮影されてみたいものなどありますか？

やはり、人と人、人と物など、人と何がか関係しているような、特に、人の優しさを感じられるようなものを撮影できればいいなと思います。つくづく思うのは、狙って撮影した時ほど、いいものが撮れないんですよね。偶然に撮れたもの、いいかげんに撮ったものほど良く撮れてしまうんです。だからこそ、人の情愛みたいなものが写ったときのうれしさといったらありません。
　自分で自分の写真に感動できるという経験はそうそうないですよね。ですから、そんな写真が一枚でも多く撮れたら素敵だなぁと思います。

これからも、そんな素敵な写真を撮り続けていってください。今後のご活躍を心からお祈りしております。今日はどうもありがとうございました。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.